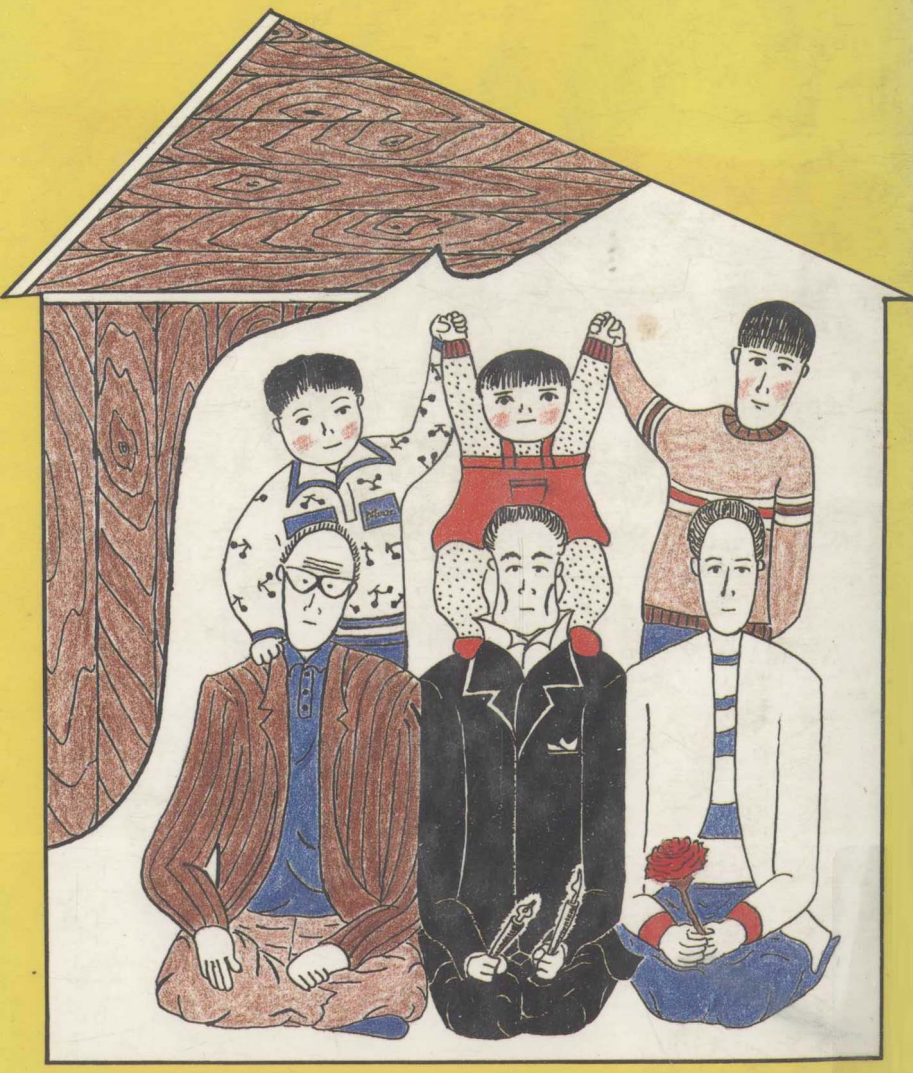
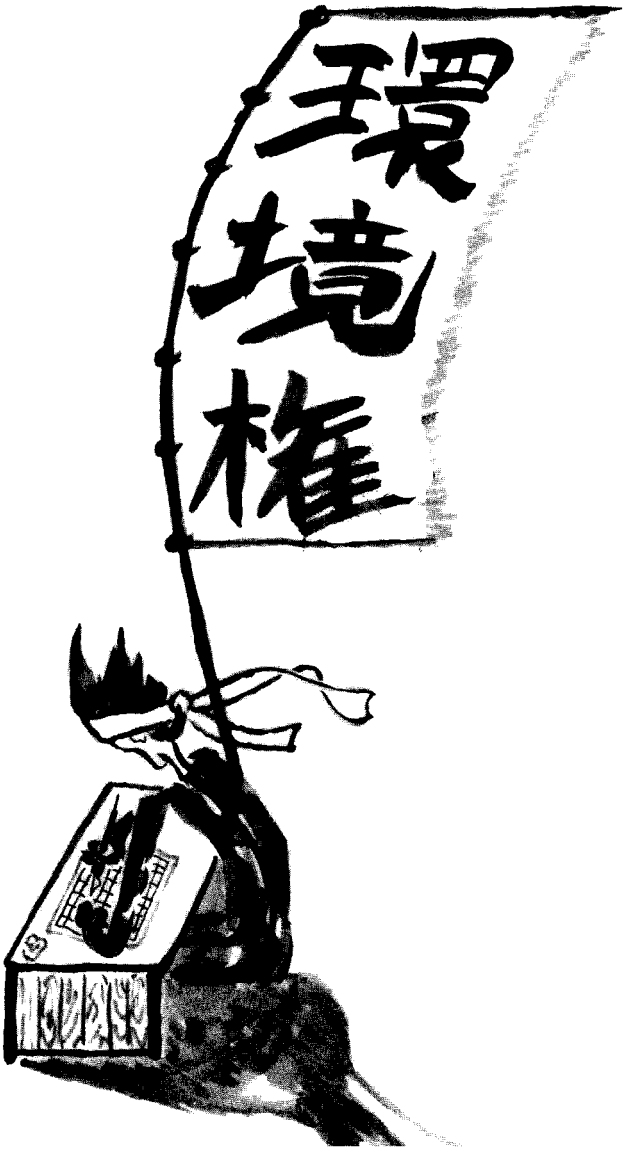
いのちき してます

松下竜一



してます

松下竜一



三一書房

松下　竜一（まつした　りゅういち）

1937年，大分県中津市に生まれる。高校を卒業後，家業の豆腐屋を継ぐ。
1970年，家業を廃し，著述業に転ず。
『豆腐屋の四季』『暗闇の思想を』『砦に拠る』『5000匹のホタル』他多数
〔住所〕〒871　大分県中津市船場町（TeL　0979-22-1703）

いのちき　してます

1981年4月30日　第1版第1刷発行

著　者　松下竜一
© 1981年
発行者　竹村一
印刷所　岩村田活版所
製本所　東京美術紙工

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電　話 03（291）3131～5番
振　替　東京 9-84160番
郵便番号　101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

前口上

『草の根通信』という眇たる機関誌に、松下センセなる軽忽の無名文士を主人公として、一種の戯文を草し始めたのは一九七五年二月のことである。

連載開始にあたって、簡潔な前書を付している。〈売れない本を切々と書き続ける松下センセが、豊前火力問題とは全然無関係に綴る珠玉の随筆しみじみと登場〉

火力発電所建設反対運動という公的使命を持った機関誌に、編集人たることの特権をもって、私小説的戯文をまぎれこませようとはかるには、こういう断りが必要であったわけである。

固苦しくなりがちな誌面に、息抜きの頁にでもなればというつもりで始めた連載が、いつしか読者から待たれ始めてみるとやめるにやめられぬまま、そこは生来のお人好しぶりで、ひたすらに松下センセのおろかしくも滑稽な生活を書き継いで、今日に至ったという仕儀である。

連載開始時三十八歳であった松下センセも、いまや四十四歳が目睫である。

幼稚園児であった長男は、早くも中学生になろうとして生意気である。

毎月、面白半分に書き流してきた戯文ながら、ふりかえってみればそこには、六年間の松下センセとその家族の生活史があり、共に運動の哀歓をわかち合ってきた同志たちとの、このうえない触れ合いが記録される結果ともなった。

そろそろ一本にまとめる時期ではないかという、同志たちの勧めをありがたいこととして、本書を編んでみることにしたのである。

由来、この町の貧しき大人たちは、次の如き挨拶を日常に交し合ったものである。

――いのちき　できよるかあんたなあ

――いのちきさえ　できよら　いいわあんた

〈いのちきをする〉とは、かつがつに生活をしているといった意味の、多分この地方に特有のいいかたで、貧しくともまっとうに生きる者たちの、最もつきつめた形での挨拶語であったといえようか。著述業者としてのこの十年間を振り返るとき、まことに綱渡りのようにかつがつ生きてきた松下センセにとって、『いのちき　してます』以上にふさわしい書名を思いつかぬのである。

一九八一年元日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いのちき　してます／目　次

前口上

小さな読者たち　7

持ち歌ひとつ　13

本なんか書いてます　18

裸の王様　24

自著を買う　27

死に至らぬ病い　33

龍にはあらず　38

四十六キログラムの音　43

線香がにおう　48

おからの味つけ　52

山の宿にて　57
感激の媒酌人　61
誰がパンツを間違えたか　66
紙関係です　70
ああ、法廷に雪が舞う　74
喜劇か悲劇か　79
ブラというヘンな奴　83
厄逃れの福の神　92
カンキョウケン確立　97
父の年譜　104
四十一歳の放蕩　109
頭が高い？　112
ああ、倒産　117
人の世の情け　121

子を喰いものに　127
のし袋遺失一件　134
風の空に……　139
いびしい　145
ケンとの契約書　150
〃石〃のたたり　156
カンの名案　162
くらやみがこわい　168
自殺志願被疑者　176
喪われゆきし渚よ　184
軒低き貧しげな家　189
ミニクキ争い　196
あれは青春だったのだ　203
髪を切る　211

酔うていないのに……　219
声が出ない　227
心理的原因？　235
あとがき

小さな読者たち

かわいい絵入りの封筒が届くようになったのは、昨年の夏頃からのこと。

初めての児童小説を出版した松下センセに、小さな読者たちからの便りなのだ。たとえば、こんなふうに——

私は『５０００匹のホタル』という本を読んだ六年生の女の子です。学校から推選図書の案内をもらった時、どれにしようかなと思い代名（ママ）をみると二つきにいったものがありました。一つは『５０００匹のホタル』もう一つは『メンコの王さま』です。でも、二つ買うわけにはいかないので、本のちょっとしたストーリーをみました。すると『メンコの王さま』はおもしろそうで『５０００匹のホタル』の方は友情のホタルとそれを待ちわびる「あかつき学園」の耳のきこえない子らとの心あたたまるふれあいと書かれてありました。

私は感動して泪が出るような本が好きです。それで父母にねだり、とうとう『５０００匹のホタル』を買ってもらい無中（ママ）で読みました。読んでいるうちに何度か泪がこみあげてくるところがありました。こんな美しいお話を書く先生は、とても美しい心の持主だと思いました。先生、どうしたら美しい心になれるのか、教えて下さい。

美しい心の松下センセは、こんなひたむきな便りに、いたくどぎまぎしてしまう。いったい、

なんと返事を書けばいいのだろう。

梨枝ちゃん。お手紙ありがとう。

あの本を読んで涙を浮かべた梨枝ちゃんは、それだけで美しい心の持主だなとわかります。だって、美しい心とは、他人のことを思いやる優しさのことなのですから。自分さえよければいいという考えではなく、できるだけみんなでしあわせになろうと思う優しさが、美しい心だと思うのです。つまり、梨枝ちゃんが、あの本に登場する耳の聴こえない松二たちのことを涙の出るまでに思いやった、その優しさをいつまでも失わないで成長してほしいのです。

大人はもう、本を読んでもなかなか涙を浮かべることはできないものなのです。

そんな返事を、どうもこれでは美しい心の持主の松下センセとしては、字が荒っぽすぎて見えはしまいかなどと気に病んで、二度も三度も書き直すうちに、さすがに照れくさくて、いそいで〈サヨウナラ〉と書き結んでしまう。

こんな便りも届いた——

私のお父さんは、一月二十日で四十才になります。私のお母さんが三十八才です。

私はお父さんがかわいそうな気がします。時々、お風呂で「瀬戸の花嫁」を歌うと、一番の〈男だったら泣いたりせずに　父さん母さん大事にしてね　のところへくると、お父さんの声が泣きそうになるのです。きっと、私が大人になったころを想っているのでしょう。だから私が代りに大きい声で（お父さんの泣きそうなことを消すように）歌います。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

『５０００匹のホタル』のうしろにりゃくれきがのっていて、先生は三十七才だそうですが、しゃしんは私のお父さんより十才以上も若いと思いました。

鑑識眼の高い少女である。『５０００匹のホタル』巻末に掲げた写真は、松下センセが長崎原水禁大会会場の壇上から発言しているその表情のクローズアップで、大参会者を前にしての緊張が双眸をキラキラと光らせて、本人も気に入っている若々しさである。

しかし、この少女にもどんな返信を書けばいいのだろう。

ぼくは昌子ちゃんみたいに大きな子供を持っていません。二人の男の子がいますが、上がケンで、やっと幼稚園です。下のカンは、まだ三歳十ヵ月です。女の子を持ったら、先でお嫁にやるときさびしいだろうなと思い、昌子ちゃんのお父さんがお風呂で歌う気持がわかります。お父さんに、よろしくね。

アッ、それから、ぼくはひどいオンチなので、風呂の中でもめったに歌いません。カン、カーン、カンカラカーンなどと、へんな節をつけて下の子をからかうくらいのものです。では、サヨウナラ。

なんとも、間の抜けた返信である。たいてい、小さな読者たちとの便り交換は一度きりで終るから、ホッとする。

北海道の伊達火力発電所建設反対運動の熱心なメンバーである棟方律子先生が、小学六年の教

室で『５０００匹のホタル』を、生徒たちに何カ月もかけて読んで聴かせたという。松下センセが伊達火力視察に訪れた日、彼女は児童代表六人を引率して面会に来た。

子供たちに囲まれて、口を開こうとした松下センセははたと口ごもった。いったい、自分のことをどう自称すればいいのか、とまどってしまった。日頃、品のない松下センセは、俺が俺がで通しているのだが、まさか児童代表諸君を前に俺がでもあるまいし、私がと改まるのも大人げないという気がして、ぼくがというのもにわかには口にそぐわない。「先生はねえ」「おじさんはねえ」などと、心中ひそかにためしてみるのだが、いかにもわざとらしくて頬があからむ。

とうとう窮した松下センセは、一切一人称なしで話し始めたものである。といっても、何を語りかければいいのかもまるで思いつかぬし、「どうだね、九州でも雪が積むと思うかい」などとつまらぬことを聞いたりしたものだ。

ぎこちない松下センセを囲んで、子供たちはくったくなく、「先生はもっと中年かと思うたら、わけえなあ」「先生、なんでそんなに鼻毛のびてんだあ」などと、散々からかう始末。

後日、六人の代表はクラスに帰って全員に松下センセとの会見の模様を報告し、黒板に似顔絵を描いたと、棟方先生がその写真を送ってくださった。白墨で描かれた松下センセの髪はぼうぼうと逆立って、怒髪天を衝くといった図であった。

東京の小学校の先生からも、教室に来てほしいという熱心な手紙を幾度もいただきながら、も

う北海道の児童でこりている松下センセは、極力ことわりの返事をくりかえして年を越した。この先生もさるものである。自分の依頼が効無いと知るや、今度は児童からのお願いの手紙ときたのである。

この本を読んでくれた先生は首藤先生といいます。首藤先生はこの本を読んでいる時、「先生はこの本にぞっこんほれこんだ。この作者を呼んで、読書会をやりたい」といっているのです。私もそう思います。先生は松下先生に何度かお手紙を出したそうですが、あまりいい返事がこなかったようです。

私たちのクラスの人は、この本で読書会をやりたいとねがっています。それで四十四名のうち三十三名が本を買いました。松下先生、こんなにみんなはやりたいのです。どうか、ぜひぜひきてください。

他人のことを思いやる美しい心の持主松下センセは、この手紙に接して涙を浮かべ、速達で承諾の返信をしたのである。上京は二月中旬と決まった。

だが、その日が近づいてくると、憂鬱は深まるばかり。六人の子らに囲まれてさえオロオロしたのに、まして今度は幾十人の児童の前に立たされることになるのだろう。いったい、何を話せばいいのだろう。

思い悩むうちに、はたと一策を思いついた。心細い松下センセは、恰好の同行者を思いついたのである。『5000匹のホタル』のさし絵を担当した画家に、一緒に行ってもらおうというの

だ。児童小説のさし絵で活躍しているIさんは、まだ会ったことはないが東京在住の若い女性である。きっと、子供たちを相手に快活に話せる人に違いないし、それに黒板にさらさらと絵を描いてみせれば、子供たちは大いに湧くに違いない。第一、むさくるしい松下センセなんぞより、若い女性の絵描きさんの方が断然魅力的ときまっているではないか。

われながらの名案に、にわかに心明かるんで、実はさっき速達でそのお願いの手紙を出したばかりなのである。児童たちが、ぜひ絵の方の先生にも会いたがっていますので、と書き添えて。美しい心の松下センセも、機に応じては嘘もつくのである。きっと、承諾の吉報が返って来るという気がしている。

さてこうなれば、あとは当日、鼻毛を入念に切って行くことを、いまから忘れぬように、しかと細君に頼んでおくことにしよう。

（一九七五年二月）

注

『5000匹のホタル』　一九七三年、理論社刊。耳の聴こえない児童たちの世界を描いた児童小説。

伊達火力発電所建設反対運動　北海道電力が伊達市の海岸に建設しようとする火力発電所に反対して、地元住民が建設差止裁判を起こしたのは一九七二年八月。提唱されて間もない環境権を掲げての公害予防裁判として注目された。

持ち歌ひとつ

「住民運動をやる者はですね。歌の三つもおぼえとかんとつきあいできませんから、ぼくも三つだけおぼえました」

そう前置きして、耶馬溪での交流会で無邪気に五曲も披露したのは、北海道伊達市から来た内科医斉藤稔さんである。これでなければ、住民運動のリーダー役はつとまらない。豊前環境権裁判第一回口頭弁論の傍聴に全国各地から駆けつけてくださった同志たちとの、なんとも愉しい宴においてであった。

斉藤氏のいわんとするところは、住民運動のように職業も違えば立場も違う多様な個人の信頼関係は、それこそ共に酒を飲み、手拍子を合わせ、肩組み合って放歌するような、裸のつきあいの底からしか生まれないということなのだろう。その言葉にうなずきつつ、松下センセは自分が失格者であることをひそかに寂しんでいる。酒は飲めぬし、歌はうたえぬし、口さえが重く――つまり、人づきあいの悪さでは定評がある。豊前火力反対運動が孤立していった原因の一つに、松下センセの不徳があることは確かである。

たとえ音痴でも音痴なりにうたうことこそが愛敬、それを恥じてうたわぬところに心の垣があるという、もっともらしい指弾を受けることがあるが、これは音痴の本質を知らぬからこそいえ

る批判である。なぜなら、松下センセくらいに本格的な音痴となると、歌が下手なだけでなく、歌詞をおぼえることができないのだ。そんな馬鹿な、あんなに頭のいい松下センセがたかが歌謡曲の歌詞をおぼえきれないなんてと、呆れられ疑われるのだが、事実がそうなのだから仕方がない。無意識裡に歌詞記憶の拒絶反応が起きるのだろう。

さりとて、松下センセも住民運動の主要な一員であってみれば、たとえばキャンプファイヤーを囲んでの交流会で、「あれっ、まだ松下センセひとり、うとおちょらんどお」などとはやしたてられて、やおら意を決せねばならぬ場面をなしとしないのである。

そのような時である。松下センセ唯一の持ち歌『豆腐屋の四季』主題歌が登場するのは。

〜　土砂降りの雨なら
　　雨なら　ぬれるだけ
　風なら　風なら
　　むかうだけ
　ルルル　ルルル
　二人で生命を
　生きて愛して貫いて
　　地球にしるしを　残すのだ

一九六九年七月から、松下センセの最初の著書に基づいて放映され始めた、連続テレビドラマ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.